

『伊勢物語』六十段と『漢書』朱買臣伝

糸井, 久 / ItoI, Hisashi

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要 / 日本文学誌要

(巻 / Volume)

69

(開始ページ / Start Page)

23

(終了ページ / End Page)

31

(発行年 / Year)

2004-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010083>

『伊勢物語』六十段と『漢書』朱買臣伝

糸井久

一、六十段の「家刀自」

『伊勢物語』六十段は、

五月待つ花橘の香をかげば

昔の人の袖の香ぞする

の名歌を含みながらかならずしも現代の研究者に好感を与えてはいない。^(注)ここではそのことを考えながら内容を検討してみよう。

六十段の本文は、^(注)こうである。

むかし、男ありけり。宮仕へいそがしく、心もまめならざりけるほどの家刀自、まめに思はむといふ人につきて、人の国へいにけり。この男、宇佐の使にて行きけるに、ある国の祇承^{しごう}の官人の妻にてなむあると聞きて、「女あるじにかはらけとらせよ。さらずは飲まじ」といひければ、か

はらけ取りて出したりけるに、さかななりける橘をとりて、

五月待つ花橘の香をかげば

むかしの人の袖の香ぞする

といひけるにぞ、思ひ出でて、尼になりて、山に入りてぞありける。

六十段の作者は、「五月待つ」の歌について、(主人公の「男」の家の家刀自で、京で共に暮らしていた女が、「男」の愛情に誠実さを感じられず、誠意をこめて愛そうという他の男の許に走って、地方の一官人の妻となった。その後「男」は勅使となり下向の途中、接待の宴で昔の妻と再会し、この歌を詠んだ)と物語っている。「男」は饗宴の席の酒肴に出ていた橘の実から発想を得たとして、(五月を待つて咲く橘の花の香によつて、かつて自分を捨てて去った妻が、袖にたきしめていた薫りを、なつかしく思い出した(今でも心の奥底に妻への愛情が残って

いる」と、わが思いを歌うのである。

この歌によつて女は、目前の勅使が昔の夫であることを思い出し、自分の行いを悔いて尼となり、山の寺に入ったと、物語られている。

ところで、『古今和歌集』巻三夏にはこの歌が詞書もなく、よみ人知らずの歌として収められている。そこでは「五月を待つて咲く橘の花の香によつて、今は忘れ果てていたはずの昔の恋人のこと、その人との恋に生きた日々」のことが、思いもかけず一瞬のうちに心に蘇つてきた」という歌になつてゐる。

物語の歌と和歌集の歌とは、同じ歌でありながら抒情の内容がちがつてゐるのだ。

私たちが手にしている『伊勢物語』は、少くとも三次にわたる増補が行われて現在の姿となつたことが、片桐洋一氏の研究によつて明らかになつてゐる。『伊勢物語』と『古今和歌集』とは深い関係をもつていて、第一次の最も古い形態の『伊勢』は、『古今集』の長い詞書のついた歌と重なり合つてゐる。それを片桐氏は第一次『伊勢』が『古今集』に反映したものと判断され、第一次『伊勢』は『古今集』成立以前に生まれたと考察された。しかし『古今集』の詞書もないよみ人知らずの歌と同じ歌をもつた六十段のような『伊勢物語』との関係は、『伊勢』の作者が『古今集』の歌によつて物語を創作したとして、『古今集』成立以後の、遅く第三次の増補によつて加えられたと考えられている。

片桐氏の考察に従うと、『古今集』の「五月待つ」の歌は、六十段の作者に、どんな人物が、どのような状況下でこの

歌を詠んだかという想像をかきたてて、散文による虚構の世界を創作させ得る力をもつた名歌だといふことができる。

ところで、先に六十段はかならずしも研究者に好感を与えてはいないと記した。それは「男」が勅使接待役の祇承（今の夫）に「女あるじにかはらけとらせよ。さらずは飲まじ」と、権勢をもつて饗応を拒否し、昔の妻を宴席に呼び出すことを強要しているところからだろう。

私は、女が六十段で歌の中で「むかしの人」と歌われながら、地の文では「家刀自」と記されていることに注目したい。「おんな・つま・ひと」ではないのである。「家刀自（いへとじ・いへとうじ）」の語はすでに『万葉集』や『日本霊異記』にも用いられている。

例えば『日本霊異記』上巻「狐を妻として子を生ま令むる縁 第二」には、「家室」と記され「イヘノトジ」と訓読されている。この話では、男は旅の途中で美女に出会い、妻となることを承諾され、「即ち家に将て交通き相住む」こととなつた。男が通い訪れる女（妻）ではなく、はじめから共に住み、一つ家に暮らす夫婦となつたのである。男の家は富裕な農家であつたらしく、この「家室」は、二月三月の頃自家で国へ供出する米を春く時、精米の労働に従事する女たちに食事を支給するため、唐臼小屋に入つたとある。そこで彼女は飼犬にほえかけられ、狐の正体を現わすことになるのだが、それはともかく、この「家室」はかなりの豪農の家の家政を担当し、使用人の管理、食料の配分・供与などの重要な役割を荷つていたことがわかる。

『伊勢物語』六十段と『漢書』朱買臣伝

また『源氏物語』帚木巻の「雨夜の品定め」の左馬頭の話にも「家刀自」が登場する。^{〔注五〕}

まめくしきすぢをたて、耳はさみがちに、美相なき家刀自の、ひとへに、うちとけたる後見ばかりをして、……

この「家刀自」にも、身なり顔つくりもかまはずに夫や家族の世話、日々の家事に打ち込む、家政を荷った主婦の姿を見てよいだろう。「雨夜の品定め」の色好みの貴公子たちの議論の根底には、家政担当者としてすぐれた能力ある妻（＝家刀自）を求めるのが、いかにむつかしいかの嘆きがある。

『伊勢物語』には、六十段以外に四十四段にも「家刀自」が登場している。^{〔注六〕}

むかし、縣へゆく人に馬のはなむけせむとて、呼びて、うとき人にしあらざりければ、家刀自、杯ささせて、女の装束かづけむとす。あるじの男、歌よみて、裳の腰に結びつけさす。

出でてゆく君がためにとぬぎつれば

我さへもなくなりぬべきかな

この歌はあるがなかに面白ければ、心とどめて、よまず、腹に味はひて。

「男」は地方に赴任する友人の送別の宴を催した。親しい人であつたので、家刀自も宴席に加わつていた。「杯をささせて」とあるから彼女は召し使う人に命じて客人に杯を勧め、酒を飲ませている。さらに彼女は旅立つ客人に女の装束（裳）を贈る。それを見たあるじの「男」が、即興に「出でてゆく」の歌を詠んで贈物の「裳の腰」に結びつけたというのである。これ

は（あなたに裳を贈ることで、私もまた「裳＝喪（凶事）」がなくなつた）という祝いの歌で、歌の前提に宴席における家刀自らしい心配りや振舞いがある。

四十四段は、片桐洋一氏の説に従うと、第二次『伊勢物語』として増補された段にあたり、『後撰集』以後しばらくの間に成立した『在中将集』『雅平本業平集』のころのものとなる。だとすれば、六十段の作者には四十四段の家刀自のイメージがあり、その関わりの上で六十段を付け加えたのではあるまいか。私は私的な友人送別の宴席にあたる四十四段の「家刀自」の姿と、公的な勅使饗応の宴に強いて出席を求められる六十段の「家刀自」（「女あるじ」）の姿とに、相反しながら照応し合うものを感じてしまう。

六十段の「家刀自」もすでに述べたように「男」の家の家政を担当し、家中で重要な役割を果す立場にあつたのだ。しかし彼女は自分から「男」の家を放棄し、他の男の言に従つて結婚し、地方へ下つてしまつた。「男」が「宮仕へいそがしく、心もまめならざりけるほど」であつたのが原因だといふ。たしかに原因は「男」の側にある。

「心もまめならざりけるほど」は、（妻への愛情も十分とはいえなかつた）ということだが、具体的にはどのようなことと考えられるだろう。すでに十六段では、紀有常は、長年つれ添つてきた妻が老齢となり、夫と別れて尼になつて姉のいる寺に移り住むことになつたと物語っている。別れに際して夫の有常は「まことにむつまじきことこそなかりけれ、いまはとゆくをいとあはれと思ひけれど、貧しければするわざもなかりけれ」

と思うのである。夫の側から（本当に夫婦仲がよいというほどでもなかったが）というのだから、これも「心まめざりけるほど」といえるのではなからうか。

「雨夜の品定め」で、左馬頭は理想の妻像を論じて、夫婦たがいの寛容・忍耐を説いている。男の立場に立つての主張ではあるが、「深き山里、世離れたる海づらに這ひ隠れぬる」女や、情愛浅くない男を見捨てて尼になってしまふ女を、「軽々しくことさらびたることなり」と批難し、「いとあちきなきことなり」と断じてもいる。これは六十段の家を出た「家刀自」にもあてはめることができよう。彼女のそうせざるを得ない原因が「男」の側にあるにしても、全面的に肯定しうるものではないのである。

女あるじであつてもごく親しい人を供応する私的な宴でないかぎり、宴席には加わらない。まして勅使接待の公的な宴席に参加することはあり得ないのだから、「男」にとつては勅使の権力を行使して無理にでも召し出す以外、昔の妻に会う方法はなかったのではあるまいか。「男」の立場からいえば、愛情が全くなかつたわけでもないし、我が家の「家刀自」という重要な立場にあつたにもかかわらず、自分から放棄して他の男の許に走つた妻に、一目でも会つて恨み言の一つもいいたくなるのは、自然な感情ではなからうか。

二、『漢書』朱買臣伝の妻

六十段の作者が「五月待つ」の名歌に心を動かされて、この

歌が、どのような人物たちによつて、どのような状況下で詠まれたかを想像し、物語ろうとした時、彼の想像の支えとなつた女の話がある。

それは中国古代の史書『漢書』列伝中の「朱買臣伝」の朱の妻の話である。ここで小竹武夫氏の日本語訳を引いておこう。^(注七)

(A) 朱買臣は字を翁子といい、呉郡の人である。家が貧しく、読書を好んで、生業に身を入れず、つねに薪や柴を刈り、それを売つて食いつなぎ、束ねた薪を背負うて、歩きながら書物を節つけて誦んだ。彼の妻もまた背負うたり、頭にのせたりして随い、しばしば買臣に道中で歌い誦まないよう止めた。買臣はいやましに速く歌うので、妻はこれを羞じて離縁を求めた。買臣は笑つて、「わしは五十歳になれば富貴の身となるはずだが、今すて四十余歳だ。お前も久しく苦しんだが、わしが富貴の身となつてお前の内助の功に報いるのを待つてくれ」と言う。妻は恨み怒つて、「お前さんのような人は、とどのつまり溝の中で飢え死にするだけのこと。富貴の身になれるなんてとんでもない」と言つた。買臣は妻を引きとめることができず、すぐ離縁を承諾した。その後、買臣は独りで道を歩きながら歌い誦み、墓地のあたりで薪を背負つて暮していた。もとの妻とその新夫が共に墓参りして、買臣が飢え凍えているのを見、呼んで飲食させたことがあつた。

(B) 数年の後、買臣は上計の吏の卒となつて随行し、荷車を引いて長安に至つた。宮門に行つて上書したが、いつまでも返事がなく、詔を公車で待つていたが、食糧や費用が乏しく上計の吏卒たちにかわるがわるの乞食してまわつた。たまたま同邑の

『伊勢物語』六十段と『漢書』朱買臣伝

人、げんじよ 殿助が天子に貴寵されており、買臣を推薦した。買臣は召されて謁見し、『春秋』を説き、『楚詞』について述べたところ、帝ははなはだ喜んで、買臣を中大夫に任じた。こうして殿助とともに侍中となった。(略)

(C) そのころ、東越がしばしばそむいた。よつて買臣は言つた。「もとの東越王は泉山を根拠地としていましたが、一人でその險を守れば、千人でも上れないところですよ。いま聞くと、ころによれば東越王はあらためて根拠地を南に移して、泉山を去る五百里の大沢の中におるとのこと。いま出兵して海上より直行して泉山を目ざし、舟を陳ね兵を列ね、席を巻くように南進すれば、これを破壊させることができましょう」。主上は買臣を会稽郡の太守に任命した。主上が買臣に、「富貴になつて故郷に帰らないのは、錦の衣を着て暗い夜路を行くようなものだ。いま子はどうかという気がするか」と言つた。買臣は頓首してお礼のことばを言上した。(略)

(D) 会稽郡では太守がやがて到着すると聞いて、民をくり出して道を掃き清め、沿道の役人が並んで出迎え見送り、行列の車が百余台つづいた。呉の境内に入ると、彼のもとの妻とその夫が道路を修繕しているのを見かけた。買臣は車を止め、呼んで後車にその夫妻を載せ、太守の邸に着くと、二人を園内に置き、食事を給した。一ヶ月ほどたつて妻がみずから首をくくつて死んだので、買臣はその夫に錢を与えて、葬らせた。

『漢書』「朱買臣伝」の妻に関する記述と六十段の共通点をまとめると、

(一)、朱は家が貧しく、彼自身も生業に身を入れなかつた。妻は

貧窮の生活にあつて不誠実な夫に愛想をつかし、自分から離別を申出てさらに新しい男と再婚した。

(二)、数年後朱は離別の後高官となり、故郷へ赴任の途中、もとの妻と再会した。

(三)、妻は、昔見捨てた夫が高官となつて現れたことで、自らの不明を恥じ、身を滅した。

の三点を挙げることができよう。

ところで、日本の古代の文人たちにとつて、『漢書』「朱買臣伝」は、周知の身近な存在であつたらしい。六世紀なかばに成立した漢詩集『懷風藻』に収められた藤原宇合の五言詩「不遇を悲しぶ」には、朱買臣の故事が引かれている。詩末の四句を引用すると、

学ハ類ニ東方朔ニ 年ハ餘ル朱買臣ニ
二毛雖モ三ニ富ニ 万卷徒然ニ貧シ

とある。(私の学問は漢の学者東方朔と同じほど深く、私の年齢も四十を越え、漢の朱買臣が不遇であつた年齢を越えてしまった。)というのだ。「朱買臣伝」の(A)とした部分に朱は五十歳を過ぎてのち高位を得たとあり、宇合はそれをふまえているのだが、彼自身は四十四歳で没しており、漢詩の表現とはいへかなり誇張したものになつている。のちに正一位左大臣に達した彼が「不遇を悲しぶ」の詩を作るのは実人生とかけ離れていふと思うが、「不遇の想い」を詩に表現する時、壮年を過ぎてなお貧窮の境遇にあつた朱買臣は、彼にとつて詩興をかきたてる身近な詩材の一つであつたのだ。

また『枕草子』百六十六段「故殿の御服のころ」にも、

内裏の御物忌なる日、右近の將監みつなにとかやいふ者して、畳紙にかきておこせたるを見れば、(源中将)「参ぜむとするを、今日明日の御物忌にてなん。『三十の期に及ばず』はいかが」といひたれば、返りごとに、(清少納言)「その期は過ぎ給ひにたらん。朱買臣が妻を教へけん年にはしも」と書きてやりたりしを、(源中将)またねたがりて……

と、朱買臣の名が出てくる。出来事の詳細はここでは省略するが、内裏の物忌みの日、参内できぬつれづれに源中将宣方が清少納言の局を訪ねようと使に文を持たせたのである。彼女は藤原齋信の詩吟を好んでいて、とくに源英明の漢詩「二毛を見る」の詩句「顔回ノ賢ナル者、未_レ至_三三十ノ期_二」が上手で魅力的だと、一条帝に申上げていた。それを宣方は知っていて、齋信に吟詠法を学び、清少納言の局近くで齋信そっくり声音で吟ずると、聞き違えた彼女が言葉をかけたことがあったのだ。手紙文中の「三十の期に及ばず」はいかが」というのは、(私の詩吟をお聞きになりたくありませんか。お訪ねしてよろしいでしょうか)という意味なのである。

清少納言は、その返事に源英明の詩をふまえず、「朱買臣伝」の(A)の部分で朱が妻に戒め教えた年齢「わしは五十歳になれば富貴の身になるはずだが、今すでに四十余歳だ」によって(あなた)は三十の年齢はとつくに過ぎているでしょう。朱が妻に出世を予言した五十歳にはまだ達していないでしょうけれど(モウ相当ナオジイサンデシヨウ)とからかつて返したのである。

また『和漢朗詠集』巻上落葉の高丘相如の詩句「落葉を山中

に踏む」に朱買臣の名が見える。^{注1)}

樵蘇ノ往反_{スル}杖ハ、穿_二朱買臣之衣_一

隱逸ノ優遊_{スル}履ハ、踏_二葛稚仙之葉_一

〈山の木こりたちが紅葉の散り敷く山路を杖を突いて往来するのは、朱買臣の錦繡の衣を傷つけるようなものだ〉というので、これは朱の伝(C)の部分、朱が故郷の会稽郡の太守に任じられたとき、帝より与えられた「富貴にして故郷に帰らぬは、錦を着て夜道を行くようなものだ」の言葉によっている。

このように平安時代の初期から、文人たちにとって『漢書』「朱買臣伝」は身近なよく知られたものであったし、その語句の一部分を自作の詩文の中にとり込んで用いても、当時の読者には十分に通じ合うことであつたのだ。

しかし『伊勢物語』六十段の作者は、朱の伝の一部の語句や挿話を物語創作に利用するのではなく、伝の中で重要な役割をもった妻の人生の全体、すなわち《朱との貧窮の暮らし→自分から夫を見棄てての離別→新しい夫との再婚→高官となつた朱との再会→自死》を物語化の対象としてとりあげ、圧縮し、当代の社会に通行するよう和風化する形で六十段を創作したのであろう。

そして六十段の作者は、高官となつた前夫との再会という女の人生の最上のクライマックスで「五月待つ」の歌を物語世界に投げ込んだ。『古今集』では、橘の花の香りを嗅いだその一瞬に心に湧き起こつた思いを表現した歌となつているが、『伊勢物語』六十段では、「男」の家の家刀自として暮らした日々以後の長い女の人生の時間と歌が結びついている。

『伊勢物語』六十段と『漢書』朱買臣伝

ところで、私はいままで「六十段の作者は」とくり返してきた。このいい方は正確とはいいたくない。一人の作者が自分の書齋内で、『漢書』を手元に置き、「朱買臣伝」をその妻を中心にして要約し、日本的に書き直したという形で創作状況を考へてはなるまい。益田勝実氏の歌語りの論に示されているように、平安時代の貴族の生活の中で、忘れたい名歌をめぐつてその成立の動機やそれに関わる人々の後日譚を伝える話^二歌語りが、広汎に生まれ、それが語り承け語り伝える営みがあつたとすれば、「五月待つ」の歌も朱買臣伝の妻の話と合わさり、人々の口に伝わり広まつて、やがて『伊勢物語』第三次増補の編者の手にすくい上げられ、「男」を主人公とする物語の一部分として収められたとも考えられる。

三、不幸なる女の物語群

『伊勢物語』の基本形は、一段（初冠り）にはじまり百二十五段（辞世の歌）で終わる「男」の一代記であり、中心となるのは「男」の恋の遍歴である。「男」が元服直後に出会つた女性は、京を離れた自家の荘園で暮らしていた「女はらから（男）」と同腹の妹（または姉）であつたという。「男」のはじめての恋は近親相姦のタブーに触れて実ることのない恋であつた。^{（注1）}二段の西の京の女は、寂れた西の京に住む、「ひとりのみもあらざりけらし（通つてくる夫のあるらしい）」という心美しい女性であつた。さらに三段以後は、一族繁栄の期待を担う「后がね」として大切に養育された女性との結ばれぬ恋

の物語がつづく。このように「男」の恋は始めから恋してはならぬ人を恋し、実ることのない恋に身をゆだねて生きる物語群とされている。さらに恋の遍歴に加えて、「京や住み憂かりけむ、東のかたにゆきて住みどころ求む」と惑いつつ旅する東下りの物語群、また政治権力の中核から疎外され酒と和歌に惑溺する主従や友人の情愛の物語群があつて、「男」の人生に深い奥行きが与えられている。

だが、これらの物語群の他に少数ではあるが六十段のように女の人生を対象として描く物語群が存在する事はあまり知られていなかった。たとえば六十二段は六十段を踏襲しながらより極端な内容になっている。

むかし、年ごろおとづれざりける女、心かしこくやあらざりけむ、はかなき人のことにつきて、人の国なりける人につかはれて、もと見し人の前にいできて、物くはせなどしけり。夜ざり、「このありつる人たまへ」とあるじにいひければ、おこせたりけり。男、「我をば知らずや」とて、いにしへのほひはいづらさくら花

こけるからともなりにけるかな

といふを、いとづかしと思ひて、いらへもせで居たるを「などいらへもせぬ」といへば、「涙のこぼるるに、目も見えず、ものもいはれず」といふ。

これやこの我にあふみをのがれつつ

年月経れどまざり顔なき

といひて、衣ぬぎてとらせけれど、すてて逃げにけり。いづち去ぬらむとも知らず。

この女性は六十段の家刀自に優つてあはれである。「男」が長く訪れなかつたので、愛情に誠意を認めることができなかつたというのだが、他の男の（あてにならぬ言葉に誘われて都を離れ、人に使われるまでに零落した身）となつた。「心かしこくやあらざりけむ」といわれるのもまたやむえないことか。「男」と再会した時、すでに長い年月を経たいたからか、女は前の夫に気付かなかつた。「男」は「私を覚えていないのか」と、「いにしへの」の歌を詠みかける。女ももう若くはなかつたのだ。この歌は（美しかつた桜の花も今は落ち散つて枯枝だけの姿になつてしまつたなあ）という酷薄な内容になつている。おそらく六十二段は六十段をお手本として、「男」の立場からより極端なものとして描こうとしたのだから、次の「これやこの」の歌とあわせて、渡辺実氏の酷評される通りであろう。^{（注1）}

それはともあれ、六十二段の二つの歌も、「男」との結婚生活——夫の愛情の頼り難さ——新しい男との出会い——男の言葉に誘われ、前夫との別離——地方での零落した生活——前夫との再会——落魄した姿を知られ行方を絶つ、という女の一生と、歌の抒情とが不可分に結びついている。

六十段、六十二段は片桐氏の説によると第三次増補に属する物語だが、女の不運な人生を物語る有名な二十四段（梓弓）も同じく『古今集』以後増補された物語である。本文は省略するが、そこには四つの歌が投げ込まれていて、はじめの二つは

(一) あらたまの年の三年を待ちわびて

ただこよひこそ新枕すれ

(二) 梓弓ま弓つき弓年を経て

わがせしがごとうるはしみせよ

(一)の女の歌は、「男」は宮仕えのため妻と別れ上京し、以後長い消息不明の年月が過ぎる。その年月、妻は夫の帰りを「待ち」、そして「わび（寂しく思い）」つづけたという。歌はその長い長い時間を表現している。そして夫の帰郷を諦めたとき、新しい男が誠意をもつて近付いてきた。妻は新しい男との結婚を決めた夜、夫は帰つてきた。(二)の「男」の歌は、〈長年私があなたにしたように、これからは新しい夫を大切にせよ〉と歌うのである。ここには彼の上京以前の愛情に満ちた時間が表現されている。(一)、(二)の歌ともに夫の上京以前、以後の女の持った長い時間、すなはち女の人生と深く結びついた歌となつている。

ところで、六十、六十二、二十四の各段とも女の主体的な判断・選択が、以後の人生を没落、破滅といった不幸な方向に決定づけてしまう事で共通している。これは男の視点に立つて女の人生を語っているからだろうが、また一方で、『伊勢物語』第三次増補の男性作者が、女の人生に関心を抱くようになり、それを物語創作の中に持ち込んできたことを示している。この関心は漢文偏重の男性文人たちにも女の作る女の物語の価値を理解し享受する土壌を作つていったと考えてよい。

注一 たとえば、片桐洋一氏は、「宇佐の使いは勅使である。

相手はその接待を命ぜられた人の妻。まことに皮肉な再会の仕方である。男はそれを知っているのである。盃を与えようと言うのである。(略) その呼び出し方がまたひどい。そう

『伊勢物語』六十段と『漢書』朱買臣伝

しなければ酒を飲まないというのである。接待役の今の夫の責任にしようやり方である。

現代のわれわれから見ればずいぶんひどいと思う。しかし、一夫多妻制の時代において、特にこれだけの身分格差がある場合には、むしろ、これだけいつまでも覚えていくれる男主人公の優しさを読みとるべきかもしれない。その優しさがかえってつらく、女はみずから恥じて尼になったのである。自分の思いを憎しみに変えることもできない苦しさ。その理由は何か。一つは身分差であり、一つは今なお絶ち切れない男への愛である。昔の暦の五月待つころ、今の梅雨も近いころ、じめじめとした季節にふさわしい重苦しい物語である。『鑑賞日本古典文学 第五巻 伊勢物語・大和物語』角川書店 昭50・3刊

また原國人氏は、「この物語の男主人公が、『ある国の祇承の官人の妻』になっているものと、妻の前に姿を現わし、酒をつがせ、歌をよむのはなにのためか。それは去った妻への恋情なのだろうか。だが、ここに愛の姿を感じることは、私にはできない。ここに見ることができるのは、男の陰湿な笑いだけだ。」『伊勢物語——成立とその世界——』笠間書院 昭49・10刊

注二 渡辺実 『新潮日本古典集成 伊勢物語』新潮社 昭51・7刊

注三 片桐洋一 『伊勢物語の研究（研究篇）』明治書院 昭43・2刊

注四 遠藤嘉基・春日和男 『日本古典文学大系70 日本霊異記』岩波書店 昭42・3刊

注五 山岸徳平 『日本古典文学大系14 源氏物語一』岩波書

店 昭33・1刊

注六 注二に同じ

注七 小竹武夫訳『漢書 中巻』列伝1 筑摩書房 昭53・1刊

注八 小島憲之『日本古典文学大系60 懐風藻 文華秀麗集 本朝文粹』岩波書店 昭39・8刊

注九 池田亀鑑・岸上慎二『日本古典文学大系19 枕草子 紫式部日記』岩波書店 昭33・9刊

注十 川口久雄・志田延義『日本古典文学大系73 和漢朗詠集 梁塵秘抄』岩波書店 1965・1刊

注十一 益田勝実『歌語りの世界』『國文』四号 東京文科大学国語国文学会 昭53・3刊

注十二 糸井久『伊勢物語』の作者の内面『日本文学誌要』19号 法政大学国文学会 1967・10刊

後藤康文『宝の八島』の背景——『狭衣物語』試論——『国語と国文学』東京大学国語国文学会 1987・8月号

三谷邦明「奸計する伊勢物語——ジャンルの争闘あるいは古注的読みの復権——」『日本文学』日本文学協会 1991・5月号

注十三 注二に同じ。『伊勢物語』の中で最も残酷な段である。女を『心かしこく』なかつたと言ひ、『はかなき人のことにつきて』と更に具体化して、同情の余地を少なくしてはあるけれども、『こけるから』とは何と残忍な言葉であろうか。また返事も出来ないでいる女の当然の態度に対して、『などいらへもせぬ』という追打ちは、輪をかけて残忍である。

(いとい ひさし・一九六〇年度卒)